近世後期における形容詞「きつい」の意味・用法とその勢力について

増井典夫

一、はじめに

「きつい」という語の使用は室町時代頃からみられるものである。例えば『日葡辞書』には次のような記載がある。

Qitçui　キツイ（きつい）　強い（こと）、きびしい（こと）、恐るべき（こと）、など
　　Qitçusa　（きつさ）
　　Qitçũ　（きつう）

『邦訳日葡辞書』

右の記述のように、室町頃の「きつい」の意味・用法は現代とそれほど異ったものではなかったようである。しかし、近世後期においては、現代の「きつい」の意味・用法である、

ⓐ感覚に受ける刺激が強い。

ⓑいいかげんなことでは許さないさま。厳しい。
ⓒこらえたり、なしとげたりするのが大変である。たえがたくつらい。
ⓓ人の気性がはげしい。
ⓔ物理的にすき間がない。ゆるみがない。また、せまくて窮屈だ。（『日本国語大辞典』より）

といったものの他に、

ⓕ程度がはなはだしい。大変な程度である。（『同』）

の意味・用法のものが多くみられる。例えば次のようなものである。

①［とみ］おばさん此頃は。おとう〳〵しうござりやす［茶やノかゝ］きついおみかぎりだの。さきからおきやくが待かねてだよ（妓者呼子鳥、『洒落本大成』7、111P）

②［高慢］おまへ迄同しやうに誉なんすわつちらか師匠なとは人まねはきついきらいさ（浄瑠璃稽古風流、『同』7、122P）

①②にみられる「きつい」の意味・用法は現代にみられないものである。このほか、

ⓖある行為やことば、情況などに対してそれが普通でないことを感嘆の気持を込めていう。たいしたものだ。
ⓗまったくその通りである。（『日本国語大辞典』）

といった例も多くみられるが、このような、現代にはみられない「きつい」の意味・用法について検討し、この語が近世後期においてどれ位の勢力を持っていたかを考察していきたい。

二、江戸語における「きつい」の勢力の広がりについて

「程度がはなはだしい、たいそう」といった意での「きつい」の用例は、数は少ないながらも近世前期頃から既にみられる。

③何者やら。道ばたにふせつておる。いて見てまいろうず。さても〳〵。ねておるこそは。とうりなれ。はれきつうようておる。（狂言記ー茶壺、『狂言記の研究・翻字編』㊀29オ⑪）

④とのさまの。おがつてんが。まいらぬこそだうりで。御ざりますれ。かういたしまするとき。きつうひろがりまする（同ー末広がり、『同』㊁3ウ⑩）

⑤茂兵衛殿へのあたりは皆悋氣から起つた事。私にきつう惚れたとて。隙さへあれば抱きついたり袖引いたり。（大經師昔暦、『日本古典文学大系・近松浄瑠璃集上』228P）

『近世文学総索引』に収められた近松世話物十二編中「きつい」は計7例（内「きつう」3例）みえるにすぎず、数は多いとはいえないが、近世中期頃以降、「きつい」の用例が多くみられるようになる。

江戸洒落本における「きつい」の意味・用法については既に彦坂佳宣氏の言及があり（『講座日本語の語彙5』「洒落本の語彙」201〜202P）[1]、この語の現代にはみられない多様な意味・用法は、「洒落本の感覚的な表現傾向によるものであろう」との指摘がなされている。

しかし、江戸語における「きつい」の「感覚的な表現傾向」によるとみられている例は、洒落本だけには限られないようである。

「浮世風呂」「浮世床」において「きつい」をみると、「浮世風呂」では15例、「浮世床」では17例「きつい」がみられる。[2]

そのうち「浮世床」での形容詞は、異なり語数144語、総用例数1027例みられるが、「きつい」の17例というのは、

よい・いい　264例
ない　209例
わるい　52例
はやい　33例
ありがたい　18例
わかい　18例

の6語に次ぐ、第7位の用例数である。現代の作品においては「きつい」は一つの作品の中で、せいぜい一度用いられるかどうかであるから、「浮世風呂」「浮世床」での「きつい」の使用頻度は相当に高いと考えられる。

この中に、

⑥いぬ「……お釜と丁度能お友達だ　きぢ「ハイ。有がたう。ホンニお釜さんもきつい御成人でございます。毎日よく御稽古にお通ひなさいます（「浮世風呂」二編上、『日本古典文学大系』129P）

⑦徳「しかし美女だ　せい「男好のする風だ　けん「亭主もちだらうの　せい「アノ婆さまが跡の方からにこ〳〵して行くから、あれは実の娘だぜ　徳「きつい〳〵。違あるめへ（「浮世床」初編中、『日本古典文学全集』290P）

⑧銭「鶴屋南北とはむかしの道外役者で、しかも位付が上上吉名人であつた　びん「今のは其家筋だが狂言方さ　長「勝俵蔵の改名さ　銭「ハハア俵蔵か　長「目さきがよつぽど上手だのう　短「きついものさ（「浮世床」初編下、『日本古典文学全集』313P）

といった例がみられる。⑥の例での「きつい」は「立派だ」というような意に、⑧は「すばらしい」といった意に、それぞれ誉め言葉として使っている。また⑦の例では「まさにその通り」当っているというような意で用いられている。

このような意味・用法は現代にはみられないものであって、彦坂氏の指摘する所の「洒落本の感覚的な表現傾向」によるとみられる「きつい」の用例と同質のものと考えてよいであろう。

このように考えていくと、「きつい」の多様な用法は江戸洒落本に特徴的なものというよりも、江戸語として広く見られたものだと考えた方がよいのではないだろうか。

三、後期上方語における「きつい」の勢力

「きつい」の語誌として『小学館古語大辞典』に次のような記述がなされている。

中世から認められるが、江戸時代には、上方系の「えらい」とほぼ同義で、地域的に使い分けられていたといえる。物事の程度がはなはだしいの意を根底に、賞賛の意から蔑視する表現まで意味領域ははなはだ広い。〔細川英雄〕

右の記述は、『江戸語事典』（昭46、三好一光編、青蛙房）にみられる、

きつい　大した　甚しいの意。

さらば二色にほめてやりませう。江戸風のきついもの　上方風のゑらいもんじや、やつちや〳〵、何ときようか。

（京伝、廬生夢魂其前日）

といった記述等を踏まえてのものであろうが、細川氏の記述をみる限りでは、上方では「きつい」はあまり用いられていなかったかのように受け取れる。

しかし、近世前期の上方では、先の⑤の例でもわかるように、数こそ多くはないものの、「程度のはなはだしい」意でも「きつい」は用いられていた。問題は上方において「ゑらい」が用いられ始めた近世後期以降[3]である。

では、次の76ページに宝暦期から寛政期までの上方洒落本において「きつい」の例が見える作品を示すが、合わせて「ゑらい」の例が見える作品も示す。(『洒落本大成』1～19巻の全作品を調査対象とした。第1巻に収められた作品の中には宝暦以前のものもあるが、便宜上ここに含めた。なお、刊年の下に示したものは『洒落本大成』の巻数である。)

用例数をみると、寛政期までの上方洒落本においては「きつい」が117例であるのに対し、「ゑらい」が61例と「きつい」の方が数が多い。「ゑらい」が用いられ出した宝暦七(1757)以降も明和・安永頃までは「きつい」の方が優勢である。

しかし、天明・寛政期になると、「きつい」と「ゑらい」は数の上ではほぼ拮抗するようになる。「徒然粋か川」(天明三)から「昇平楽」(寛政十二)までの範囲でみると「きつい」は41例、「ゑらい」は47例である。また、明和年間の例では、

⑨ 客 きつい酔よふてあつた(異本郭中奇譚『洒落本大成』4、321P)

と酒酔の程度のひどさを表すのに「きつい」が用いられていたが、寛政年間では、

⑩ 客 ゑらいよふて足がやくたいじや(睟のすじ書『洒落本大成』16、129P)

と「ゑらい」が用いられるようになるなど、次第に「きつい」の領域に「ゑらい」が入り込んでいく様子がうかがえる。

ただ、「きつい」の勢力は、

⑪ 綾 切字が三ツ有てそれは仕合じゃナア申宗匠もしも切ぢで無ふて穴痔が三ツ有つたらきつふむつかしうて療治がなるまい（昇平楽、『洒落本大成』19、70P）

のように、寛政年間ではまだまだ「きつい」の勢力は大きかった。

享和年間以降でも、

⑫ は、……是はさもしい物でござりまするけれど（トづだぶくろより取出すつくね芋）（略）きせ イヱ〳〵是は手前のわろかきつい好物で御座ります（嘘之川、享和四・1804、『洒落本大成』23、76P）

⑬ 菊 あんまりあほらしい作きついあはてナ辻しかし是で落付たであろ（竊潜妻、文化四・1807、『洒落本大成』24、202P）

のように文化年間頃までは「きつい」の勢力はまだまだ大きかったようである。

以上、まとめると近世において「きつい」は、少なくとも文化年間頃までは江戸だけではなく上方でも広く用いられていた語だということである。

作品名	刊年	巻数	用例数 きつい	用例数 まらい
1 会海通窟	(寛保三・1743)	1	1	
2 拾遺枕草紙花街抄	(宝暦初めか)	3	1	
3 穿当珍話	(宝暦六・1756)	2	1	
4 月花余情	(再板・宝暦七)	3	4	
5 新月花余情	(宝暦七)	2	2	
6 陽台遺編・媚閣秘言	(宝暦七)	3	2	
7 陽台遺編〈異本〉	(不明)	3	1	
8 聖遊廓	(宝暦七)	2	5	
9 浪華色八卦	(〃 七)	2		1
10 秘事真告	(〃 七)	2		1
11 遊客年々考	(〃 七)	3	3	
12 このてかしわ	(〃 十二)	3	1	
13 列仙伝	(〃 十三)	3	5	1
14 開学小筌	(〃 年間)	3	9	3
15 玄々経	(〃 年間か)	3	2	
16 遊郭擲銭考	(明和二・1765)	4	7	
17 色里つれ〳〵草	(〃 三)	4	1	
18 間似合早粋	(〃 六)	4	3	
19 郭中奇譚〈異本〉	(〃 八)	4	11	2
20 胆相撲	(〃 年間)	5	5	1
21 浪華今八卦	(安永二・1773)	6	1	1
22 風流睟談議	(〃 三)	6	5	1
23 無論里問答	(〃 五)	7	1	
24 風流裸人形	(〃 八)	8	1	
25 虚辞先生穴賢	(〃 九)	9	3	2
26 千字文	(安永から天明初)	10	1	1
27 徒然粋か川	(天明三・1783)	12	2	
28 浪花花街今今八卦	(〃 四)	12	1	
29 粋宇瑠璃	(〃 五)	13	2	1
30 短華蘂葉	(〃 六)	13	2	6
31 粋の源	(〃 七)	14		1
32 言葉の玉	(寛政五・1793)	16	1	
33 睟のすじ書	(〃 六)	16	2	14
34 遊里不調法記	(〃 六)	16		2
35 北華通情	(〃 六)	16	2	
36 粋庖丁	(〃 七)	16	2	1
37 戯言浮世瓢単	(〃 九)	17	1	
38 うかれ草紙	(〃 九)	17	5	
39 阿蘭陀鏡	(〃 十)	17		1
40 十界和尚話	(〃 十)	17	4	2
41 粋学問	(〃 十一)	17	3	5
42 野暮の技折	(〃 十一)	18	1	
43 身体山吹色	(〃 十一)	18	4	10
44 南遊記	(〃 十二)	18	8	3
45 昇平楽	(〃 十二)	19	1	1
計		117	61	

四、「きつい」の終止連体形の副詞的用法

この節では「きつい」の〈終止連体形の副詞的用法〉について考えてみたい。

形容詞の〝終止連体形の副詞的用法〟については、拙稿「形容詞終止連体形の副詞的用法」（国語学研究』27、1987）において「えらい」の場合と「おそろしい」の場合を中心に取り上げているが、「きつい」についても同様の例が見られる。

この点について彦坂佳宣氏は、

⑭ 文里 おいらんさあ〳〵まちかねていたきついいそがしい事だの 九重 なアにマアなぜ此頃はおいてなんせんへ

（傾城買二筋道、寛政十・1798、『洒落本大成』17、119P）

の例を挙げ、⑭の、

形容詞へ掛かるともみえる結合法も「浮世風呂」などに無いわけではないが、全体に江戸洒落本において多様である。（前出「洒落本の語彙」202P）

と記述している。

しかし、この記述だけでは不十分な点もあるように思われるので、もう少し掘り下げてみたい。

寛政期までの範囲（『洒落本大成』1～19巻）で洒落本の用例を拾うと、「きつい」の形で形容詞を修飾しているとみられる例（「きつふ、きつく」は含まない）として次のものが挙げられる。

まず江戸洒落本の例であるが、⑭の例以外に、

⑮ナント旦那のお隣はお慰みになりましたかと申せはイヤモウきつい面白ひ事と云て彼め花を貰ひに来たと思ひ（初葉南志、『洒落本大成』9、233P）

の例が挙げられる。（なお、彦坂氏の記述を読むと、他にも同様の例が見出せそうであるが、実際にはなかなか見出せない[4]）。

一方、上方洒落本にも同様の例がある。

⑯ 花 さてモシお下りのあいだにきつひうつくしい子が出てゞござり舛た（略） も そいつよぼふかのゥ（睟のすじ書、『洒落本大成』16、135P）

⑰脇道からかふいふとどふやら親仁くさいけれど今の娼はきつい仕にくひげな（粋学問、『洒落本大成』17、317P）

⑭、⑮の例と⑯、⑰の例との間に特に用法の差は見出せないから、彦坂氏の記述のように特に江戸洒落本に多くみられる用法とは（数から言っても）いえないであろう。言い換えると、「きつい」が終止連体形の形で形容詞を修飾する用法は江戸、上方を通じて（洒落本全般に）みられる用法だということである。

次に、被修飾語を形容詞と限定せず、用言全般と考えると、「きつい」の終止連体形の副詞的用法の例には次のようなものが挙げられる。初めに江戸洒落本の例として、

⑱元来が仏道から出たによつて色道も知て居ます。又きつい信心な者月の三日には。闇ひ内から大師様へ参て。（風俗七遊談、『洒落本大成』2、224P）

といった例が挙げられる。一方、上方洒落本の例でも、

⑲達者な物しや、帰りにお杣と鹿野に逢た、きつい時花じや、（粋庖丁、『洒落本大成』16、253P）

⑳遊戯も沢山有のに物好な事じやそれを興行た衆はキツイ骨折な事じや（南遊記、『洒落本大成』18、176P）

といった例が挙げられる。この点でも用法の広がりは江戸と同様である。

なお、彦坂氏の記述では「浮世風呂」などに「きつい」が形容詞を修飾する例がみられるかのように受け取れるが、「浮世風呂」「浮世床」にはそれに該当する例はない。形容動詞を修飾する例としては、

㉑おらアきつい嫌だア。（浮世風呂、二の下、『日本古典文学大系』160P）

のような、「きついきらいだ」の例が当てはまるかもしれない。（「きついきらい」の例は、他に「浮世風呂」1例、「浮世床」1例）

「きついきらい」「きついすき」の例は江戸洒落本に多く、寛政までの範囲では「きついきらい」22例、「きついすき」11例が見出せる。

㉒わつちらアその通が。きつひきらひさ。（淫女皮肉論、『洒落本大成』7、344P）

㉓清たきぬしやきつい仏さんがきらひさぬしやまづなんだへ神道者かへ（郭中掃除雑編、『洒落本大成』7、88P）

㉔わしはあた名を高慢と申やして上るりかきついすきてありイス（浄瑠璃稽古風流、『洒落本大成』7、123P）

「浮世風呂」「浮世床」での用例は江戸洒落本にみられる用法と同様のものと考えていいであろう。

ここまで、「きつい」が形容詞あるいは形容動詞を修飾しているように考えられる例をみてきたが、上方洒落本には、このほかに「きつい」が動詞を修飾しているように見える例がいくつかある。

㉕東婆様は李節推といふ若衆方にきつい打込で花みちから李節推か馬ニ乗て出られましたれば（聖遊廓、『洒落本大成』2、331P）

㉖なるほどかねの緒とはよふ見立た貴公の所の長吉はきついさいが働く（粋学問、『洒落本大成』17、314P）

㉖の例だと「きついさい」＝「はげしい才能」といったように考えられなくもないが、やはり「大そう（さいが働く）」と考えるのが自然であろう。㉕の例も「大そう（打込で）」と解釈するのが自然と思われる。

以上、「きつい」の終止連体形の副詞的用法は江戸のみならず上方にも広くまた多様な姿が見えることを述べた。

五、幕末以降の「きつい」の用法の片寄り

上方において「きつい」が多様な用法を持ち、広く用いられていたことを述べてきたが、文政三（1820）年の洒落本「当世粋の曙」でも「きつい」は4例（「ゑらい」は7例）ほどみえ、まだまだ「きつい」の勢力は大きかったように思われる。

しかし、天保二（1831）年刊の「老楼志」に至ると、「ゑらい」の勢力の伸びに押されて「きつい」の勢力が衰退に向かう様がうかがえるようになる。

「老楼志」では「ゑらい」が計18例みえるのに対し、「きつい」は次の、

㉗ 半 ……ぜんたい舟場の者は気がきつひ。其代リまた陽気じや。（『洒落本大成』28、322P）

の1例のみであり、「程度のはなはだしい」意では次のように、

㉘ 伊 ゑらふ美しいナア。（同、329P）

「ゑらい」が「きつい」の勢力を完全に奪ったと考えてもよいように思われる。

元治（1864～1865）頃の滑稽本「穴さがし心のうちそと」でも「ゑらい」が計29例みえるのに対し、「きつい」は次の、

㉙ クメ 地下に言はれるより当こすりの方ハ稲荷山の巨燵でキツ当るゼナア（『近代語研究』4、479P）（なお、この例は「きつう」の短呼形と考える）

1例のみと、「きつい」の勢力はすっかり狭まっている。

このように化政期頃まで上方において広く用いられてきた「きつい」は天保頃になって「ゑらい」にすっかり勢力を奪われたわけだが、それでは江戸の場合はどうであろうか。

「浮世風呂」「浮世床」で「きつい」が広く用いられていたことは先に述べたが、天保期においても、

㉚ 金「ナニおれか、拙者めは今日仲間の者の付あひにて、（略）小三「道理こそ、マアきつい御機嫌。（假名文章娘節用、後編中、天保二～五・1831～1834、『有朋堂文庫』80P）

㉛ 仇「ヲヤ気障な。増さん、女房さんだとかはいそうに。ネヘ私やアもう女房はきついきらひだよ（春色辰巳園、後編巻之六、天保四～六・1833～1835、『日本古典文学大系』331P）

のように「きつい」は広く用いられていたようである。（假名文章娘節用では「きつい」5例、「春色辰巳園」では3例）

しかし、幕末以降「きつい」の使用は限られた範囲のものになっていく。

「七偏人」（安政四～文久二・1857～1862）では、次の1例のみである。

㉜跂「しかし、今度は、自己（おいら）といふ強者（こわもの）が味方に付いて居るから」喜次「よしサよしサ。お前（めえ）はきついヨ。（四ー中、『講談社文庫』下45P）

次に明治前半の作品をみてみると、「安愚楽鍋」（明治4～5・1871～1872）、「怪談牡丹燈籠」（明17・1884）、「雪中梅」（明19・1886）には「きつい」の例はみえず、「当世書生気質」（明18～19・1885～1886）、「浮雲」（明20～22・1887～1889）には1ケ所ずつ用いられているのみである。

㉝（須）……モウ〳〵幹事ハ願下だ。ア、、辛度（きつか）〳〵。（書生気質・第一回、『明治文学全集』63P。なおこの人物は西国なまりの人物として描かれている）

㉞お政が顔を見るより饒舌（しゃべ）り付けた。「今貴君（あなた）の噂（うわさ）をしてゐた所（とこ）さ。（略）きついお見限りですね。（浮雲・第三編、『明治文学全集』71P）

江戸語での「きつい」の多様な用法の名残は、わずかに㉞の例にみられるのみである。

明治期半ばの辞書をみても、たとえば『漢英対照いろは辞典』（明20・1887）には、

きつい〔俗〕（形）強、つよき；烈、はげしき

strong; severe

というように、現代でも使われる「きつい」の意味・用法しか挙がっていない。

ただ、『言海』（明22・1889）には、

きつし（形）㈠甚シ。イトドシ。「暑サー」「痛ミー」キツク似ル」太甚㈡強シ。剛（タケ）シ。剛

と「きつく似る」という例が挙がっており、これは「たいそうよく似ている」との意と考えられるから（㈡気の強さが似ている」と捉えるのは現代の用法に引きつけすぎであろう）江戸語的な「程度がはなはだしい」といった意の用法も残っていたと考えるべきであろう。

さて、用法の片寄りの要因についてであるが、上方では「えらい」の勢力の伸びによって「きつい」の勢力が奪われたわけであるが、江戸語、東京語においては「えらい」の勢力の伸びに押されたと考えるよりも[5]、別の要因を考えた方がよいようである。

一つの要因として考えられるのは「程度がはなはだしい」意を表す語として「きつい」はあまりにも俗語的と考えられ、その代わりに「実に」「たいそう」「まことに」といった程度副詞類が規範的な語と考えられ、勢力を増していったのではないかということである。「実に」「たいそう」「まことに」といった語は人情本あたりでは広く用いられている語である[6]。これらの語はどちらかといえば上層階級で用いられる語であったが、中流以下に多く用いられていた「きつい」を押しのける勢いをみせ、明治期において標準的な東京語として認められたということではないだろうか。

「安愚楽鍋」から「実に」と「たいそう」の例を挙げておく。

㉟モシあなたハどういふ腕を出して婦人をおころしなさるのでげス実にふしぎ妙でごぜへす。ア、おそれべ〳〵（初編、○野幇間の諂諛、『明治文学全集』142P）

㊱馬「牛公ひさしくあハねへうちてめへハたいそうしゆつせして（略）牛「ヲ、馬かてめへこそこのせつハたいそうりつぱな車をひいて一六にやアにぎやかなとこへばかり（三編、當世牛馬問答、『同』156P）

六、まとめ

本稿での考察をまとめると次のようになる。

1　「きつい」はこれまで「洒落本に特に多くみられる語」とのみ説明されてきたが、洒落本のみならず、江戸語全般に広くみられる語である。

2　「江戸では〈きつい〉、上方では〈ゑらい〉という地域的使い分けがみられる」との説明は、適切でなく、上方においても「きつい」は化政期頃までは広く用いられた語である。

3　「きつい」の終止連体形の副詞的用法も江戸・上方共にみられるものである。

4　上方においては天保頃から「ゑらい」の勢力が「きつい」の勢力を圧倒するようになる。一方、江戸においても幕末頃から「きつい」の勢力は衰えていく。

5　「きつい」の衰退の一要因として、「きつい」が標準語にふさわしい品格を持たない語と規定された、というようなことが考えられる。ただし、これは仮説であり、今後更に検討を要する。

注

（1）以下に該当する部分の記述を挙げておく。

通言類を通しても気付くことであるが、洒落本には感覚的な表現傾向が色濃い。遊里社会が好悪・美醜に関心深く、口説を弄して遊ぶことを第一とするためであろう。衣裳類の色彩などの描写もそうであるが、また表現法としても、「ばからしい」「けしからねェ」「うそわねェ」など、物事に対する感情的・感覚的な評価やあしらいをしばしば文末にあって感動詞的に表出するような点も注意される。今まで述べて来た、普通と異なる語形や用法をことさら使う点も、これと通うところがあろう。ここでは、それを、多用される形容詞「きつい」から窺ってみよう。

①三 茶を呑なんせんか　金 いや〳〵　三 たばこはへ　金 たばこもいや　三 ヲヤきつい愛想づかしさ。（甲駅新話　安永四年1755）

②三 アイそんならどふぞ、又此頃にお出なんし　谷 正月の十二三ある時に来やせふ　三 きつい愛想さ。おさらばへ（同右）

③谷粋 金公、なんときつい馬じやあねへか（同右）

④女房 一ツおあんなんせ。といふては　平 これはきつい小盃な。今日一日、よつてはゐるけれど、此やうな小盃では、少し、くじめる。すぐツたいやうじや。例の大物を〳〵。（遊子方言）

⑤五郎 十三で売れて親判なれば（中略）跡せうみ十年六両づめぐらいな女だが、子がいだけ、年いつぱい十五両か。　須磨 としをあてなんすとおもやア。　五郎 おつと気のみじかへもんだ。こゝからわりださねへけりやア、きつい所はあてられねへ。（傾城買二筋道　寛政十年1798）

⑥小花屋娘お中 どふだ、次郎どん。きついものだねヱ。前のお松どんが、居ねヱけりや、亀山へ斗いきなさるな。　次郎 こりやアめいわく。客衆さへ来やうと云ば、いつでも参りやす。（辰巳之園）

⑦女郎 もし〳〵。　客 アゝきつく酔ふた。（同右）

⑧文里 おいらん、さあ〳〵まちかねていた。きついそがしい事だの。　九重 なアに。マアなぜ此頃はおいでなんせんへ。（傾城買二筋道）

⑨客 繁さん、一トツ頼やす。　利中 私が出ませう。　△藤兵衛さんがお花さん、〳〵と、云なさつても、お花さんは、やです〳〵と、云なさります。　大勢 きつし〳〵（辰巳之園）

ここには、「きつい」の多様な用法がみえる。①②は「きつい」が「愛想（づかし）」へ掛かり、その情態説明をしつつ「きつい」

の意味から生じる詰りの気持を表している。しかし、③～⑥などは修飾語「きつい」と被修飾語との意味的関係はぴったりせず、自然な意味関係を外しひねった表現となっている。従って、大変な数の馬だ（③）、不便な小盃だ（④）、正確な年は当てられない（⑤）といった意味は文脈の助けをかりて初めて理解できる。「きつい」は、こうした事態に対する表現者の抱く感覚的な程度のはなはだしさを表すことに向けられているのではなかろうか。⑦⑧は、こうして既に程度副詞の用法である。更に⑨は、感動詞的に程度のはなはだしさに対する感覚的な評価をもっぱら表し、ここでの声色に対する上手だ上手だという意味は、場面に寄り掛かって理解されるにすぎなくなっている。逆にいえば、どのような事態に対しても用いられ、もっぱらそれについての心情的な側面を表現するのである。数量にも（③）正確さにも（⑤）状態にも（⑦⑧）用いられ、評価的な面も、詰り（①②）驚き（③）不満（④⑥）称讃（⑨）などと、多岐にわたる用法がみられる。⑨のような形は上方にもあり、⑧の形容詞へ掛かるともみえる結合法も「浮世風呂」などに無いわけではないが、全体に江戸洒落本において多様である。特定の修飾関係や意味領域の範囲を外し、程度のはなはだしさを感覚的に表現するものといえよう。『魂胆総勘定』（宝暦四年1754）は、「きつい好さ」「きつい芸さ」を通言として掲げている。

（2）先の記述において彦坂氏は「遊里文学としての洒落本」を念頭に置いておられるようなので、ここでは江戸語の代表的な資料として滑稽本を取り上げた。黄表紙、川柳等にも「きつい」は広くみられる。

（3）「ゑらい」の出自等については、拙稿「形容詞〈えらい〉の出自と意味の変遷」（『文芸研究』117）参照。

（4）強いていえば、次の例あたりが該当するか。

村 きついじやうのねへこつたの（廓大帳、天明九・1789、『洒落本大成』15、120P）

（5）江戸語・東京語における「えらい」の勢力はそれほど大きなものではない。注3に挙げた拙稿参照。

（6）拙稿「江戸語における形容詞〈いかい〉とその衰退について」（『国語学研究』28）の第八節参照。

（ますいのりお・専任講師）